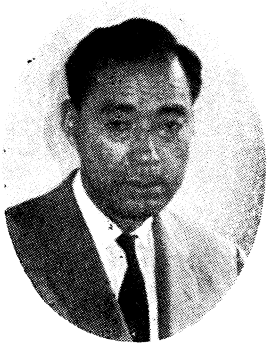


# ごあいさつ

専務理事 羽 田 巖



今回はからずも、皆様のご推挙によって、先輩末森専務理事の後任として、土木学会に勤務することになりました。

私どもは学生時代から土木学会に対する尊敬と憧憬の念をうえつけられましたが、正直のところ

学校出たては会誌も少しは読みましたが、年を経るにしたがってなござりになり、何となく近づきにくいという観念が先に立つようになりました。毎月の会誌も特に気をひかれる記事以外はほとんど読んだこともないといった怠け者になっておりました。まことにおほずかしい次第です。

今回、当学会の仕事に関係する者として、その責務の重大性を改ためて認識している次第です。50年の歴史と伝統をもち、われわれの先輩が精魂を打ちこんで築いてきた、この学会を、しかも末森先輩の残された業績を維持し、発展させることは大変なことだと自覚しています。

ことに来年は50周年記念事業という大行事もひかえています。会長、副会長をはじめ各理事の方々のご指導によって、また会員各位のご鞭撻のもとに、この重責をはたしたいと念願しています。どうぞよろしくお引き廻しのほどお願い申し上げます。

昨今のわが国の建設業界はいわゆる建設ブームといったまことに恵まれた時期であって、過去においては今日ほど活発に土木事業が営まれたことは例がないといえましょう。国鉄新幹線、高速道路、大ダム、オリンピック関連工事など世紀の大事業がぞくぞくと行なわれています。こうした大事業がわが国の経済文化の発展に寄与することは言をまたず、これらがさらに新しい公共投資の需要を呼びおこす結果となりますので、わが国の公共投資の遅延は一朝一夕にとりもどすことはできません。したがって建設工事は今後も必然的に活発に行なわれると考えられます。こうした時期に学術および技術のいちじるしい進歩発展を促すことはまた当然のことで、そのスピードにおいても目ざましいものがあり、一刻も油断

はできないと存じます。

昔は蒸気機関車で河川の堤防の土を運搬することのみで一生涯を過ごした技術者もいましたが、いまは大型土工機械の出現で何百万立方メートルという大土工もきわめて短期間に消化してしまい、仕事も技術者もめまぐるしく回転しています。山や川の障害も、トンネルや橋の技術の進歩と、優秀な材料、機械の使用であまり問題にされなくなりました。

また貿易は自由化され経済も文化も世界的視野を持たねばならない時代に土木工学も土木技術もまた世界的交流を要求され、低開発国への土木技術の輸出も考えられます。こうしたときに、土木学会のはたす役目もまた重大でなければなりません。さいわい30余の各種委員会が設置され、延べ800人に達する委員各位が熱心に活躍されている現状はまことに心強いものがあると存じます。

学会が活発に活動するには財政的裏づけがまた必要ですが、財政的基礎をつくるにも現在はよい時期ではないかと考えられます。以前から夢として考えられていた「土木センター」の会館の建設もよい時期ではないでしょうか。講堂、会議室、読書室、図書室、ロビー、宿泊施設などを備えた会館を土木技術者のセンターとし、土木工学に基礎をおく他の学会、協会などにも利用していただくか、同一会館内で事務をとることができれば、相互に利便が多いし、能率的であると考えられます。また地方在住の会員などが上京したときに利用していただいたら土木技術者全体の融和、親睦が増進され、わが土木界の発展に役立つものと信じます。

土木工学といってもその分野は広く、各方面にわたっているので各専門の方に十分活動していただかねばなりません。その活動がしやすいように側面的にお手伝いをし、また各種の研究や業績を発表していただくことによって、わが国土木技術の進歩向上に寄与することができれば、当学会の使命の一端をはたしたと存じますが学会自身も運営をできるだけ能率化し、本部・支部の連絡を密にして、こうした目標に向かって進み、栄光ある50年の伝統をはずかしめないよう努力したいと念願しております。

1963.6.7・記